

# 地域特集

— 熊本日日新聞

# ほんなもんの力

障害者作業所「夢屋」代表

宮本 誠一

こっちは、本物が残ってとっとなかなかですかね。  
 障害者の作業所「夢屋」を始めて十三年目になります。行き帰り、この時期には頂に雪をかぶった阿蘇の五岳がそびえ、田畑が広がっています。それを見ていると、ふと故郷の荒尾を思い出すんです。海岸線の彼方まで広がった干潟や、冬の光を跳ね、舐めるように湧き上がる潮の満ちや、淡い紅の夕日が脳裏に浮かんできます。

教師を辞め、福祉の仕事をしている不思議さや、これまで出会った障害者のこと、離れて暮らす我が子や年とった両親への思い、そして何より、こんな自分でも、この世に生かしてもらっているありがたさといつか、生命(いのち)の重みを阿蘇の本物の「風景」が浮き上がらせてくれるんです。

子宮の中の赤ん坊が魚の姿から哺乳類までどるそうですが、石ころ一つにもそんな長い歴史がまつてるんじゃないでしょうか。「風景」が本物だからこそ、見ている者をなつかしい場所へ連れていくんだと思います。

「音」もそうです。早朝、一人で仕事をしていると、薄闇の中に冷気を揺らして、慌ただしい年の瀬とは対照的に阿蘇神社の太鼓の音が、ドーン、ドーンと響いてきます。はるか昔から人の生活と結びついてきた音の波が、起きたさうとして人々の呼吸と共振して、琴線を揺らすみたいです。作業所をしながら、畑仕事も始めました。

パンづくりもひと段落した後、取れたての泥のついた大根やサトイモをメンバーが自分たちで調理し、アメ色になった高菜漬けなどが食卓に並びます。

「昨日はさみい中、パンばとどけてくれち、すんまつせーん。えらいあたちちが、がまだしよるけんな、こんだあ、赤ど漬けば持ってきた。ちっーとばってん、食うてはいよ」

季節折々のものが地元の言葉で差し入れられると、一年で積もった垢がたちまちこぼれ落ち、体の奥に眠っていた人のぬくみや感覚まで目覚めていくようです。

「夢屋」へ通う仲間たちと私。その者たちは、確かにこの地の恵みや一語一語に生かされているんですよ。

傷ついたり、涙したり、希望は失いそうにもなるとぼってん、まあーだ残っとる「ほんなもん」の力で、新しか年も、精いっぱいあ笑顔でやっていきたかです。

みやもと・せいいち NPO法人「夢屋」フットワークス」代表。阿蘇市一の宮町で障害者の自立を支援する小規模作業所「夢屋」を運営。1961年生まれ。



写真上は休憩時間に歌う夢屋のメンバー。左が宮本さん。写真右は焼き上がったパンをお客さん(右)に届ける  
 —阿蘇市(横井誠)